

---

# べすとげーむ おぶざらいふ

武上 溪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

べすとげーむ おぶ ざ らいふ

### 【Nコード】

N8275F

### 【作者名】

武上 溪

### 【あらすじ】

タイフーンアイの高宮愛阿部史也の中学生時代を、竹山透がスポーツノンフィクションとして描く全13話連載開始！！

―前書き

献辞

管理者のウメさんに

軟式テニスをプレーする全てのプレイヤーに

そして

作者の前衛を務めてくれた3名との思い出に

本作を捧げる

べすとゲーむ

おぶざらいふ

―前書き

まず読み始められる前に、お断りです。

本作はタイフーンアイ クライムズクライシス 君はあの日のまま帰ってきた 神様はきつと見ている を読まれてない方には、解らない部分が有ります。

また、ある程度の軟式テニスの知識が無いとゲーム場面では、イメージできない恐れがあります。

主人公の”私”が取材を行って、ノンフィクションを書いた校正前元原稿と云う形式になっています。

よって、本作は竹山透のキャラクターに沿って書かれています。つまり、語り手自身もフィクションのキャラクターである事を、踏まえて頂きますようお願いします。

本作は、全ての登場人物に特定のモデルは存在しません。

ただし、高宮愛が切り札として使う、弾まないサーブは、作者が中学生の時に、実際に軟式テニスの試合で使ったサーブです。レシーブゲームで、全てのボールを打ち込んだのも、作者が実際に使った戦法です。高宮愛同様、作者は一回戦をそれで勝ちました。ただし、相手は中学生日本チャンピオンでは有りません。また、本作のような人間模様はありませんでした。

2回戦で、まったくファーストサーブが入らなくなり、ストレート負けしたのも事実です。

また、軟式テニスのルールがいつ改訂されたか不明瞭な為、本作の試合が行われた年を明記して有りません。ルール改訂前に行われたとご理解ください。

オープニングテーマとして、つじあやのさんの”愛の真夏”を。エンディングテーマとして、同じくつじあやのさんの”クローバー”を聴いてみて下さい。

では。

発端となる写真を竹山透が見る事になる…クライムズクライシスから3年後の8月。  
灼熱のJR岐阜駅5番ホームから、物語を始めます。

1次話。

第1話高宮家への取材

## ―第1話 高宮家への取材

### ―第1話高宮家への取材

その日は暑かった。

JR岐阜駅5番ホームで、私は流れ落ちる汗をバンダナで抑えていた。

時計は午後の2時を差し、ホームに人影はない。

やがて、駅のアナウンスが列車の到着を知らせた。

―まもなく。区間快速大垣行きが、5番ホームに到着します。黄色い線まで下がってお待ち下さい―

4両編成の列車から降りてきた、山際正義やまぎわ まさよしを見つけて声を掛ける。

「正義くん！。竹山です。」

身長は180cmくらい。スーツを着て眼鏡を掛けた姿は、大学生3年生とは言え立派な紳士に見えた。

「こんにちは。すいません竹山さん。今日はよろしくお願いします。」

「いや！。高宮さんの取材に同行できるなんて光栄ですよ。…お父さんは、まだアフガンに？」

「ええ…。また2部がらみです。無事に帰ってくると良いんですけど…。それはそれとして、どうやって高宮さんのアポを？」

「ベリーペットグッドレストランの中島社長です。大学時代のバイト仲間だったんです。高宮さんと。（タイフーンアイ参照）そのツテです。ただ、言えない事は言わないと…。おっしやってまして。そ

れでも、会いますか?。」

「構いません。本人の顔を見るだけでも、取材はしなければならな  
いと、父の山際厚やまぎわ あつしに言われています。」

取材対象は高宮たかみや 愛あい。

性同一性障害研究家。このJR岐阜駅前のタワーマンションで、3  
年前銃撃戦があった。岐阜タワーマンション705号室で、謎の武  
装集団と陸上自衛隊が撃ち合ったのだ。

たまたま外を通りかかった、タクシー運転手や通行人、ドライバー  
が銃声と砕け散る窓ガラスを見ている。

にもかかわらず、マンションの住民はこの銃撃戦について、なかっ  
たと口を揃えた。フリージャーナリストの山際厚と、息子で助手の  
正義は関係者に取材を試みてきたが、すべて拒否された。

そして今日。

私こと竹山透たけやま とおるを同行する条件で、705号室の住人高宮 愛から取  
材の約束をとりつけた。

私はスポーツノンフィクションライターで、高宮 愛は私のファン  
であるらしかった。

本当の所は、山際正義が銃撃戦の話を知りたいのだが、それには一  
切答えられないと言われている。そのかわり、竹山透には会ってみ  
たいのでと云う事だった。

エントランスで705を押すと、女性がインターホンに出た。

「竹山透です。今日の取材は可能ですか?。」

「山際さんも一緒にですか?。」

「はい。山際からの質問は有りません。お顔だけでも拝見させて下  
さい。」

「わかりました。ロックを解除します。お入り下さい。」  
山際正義は、ホッとした顔をした。

705号室のドアに現れたのは、社長秘書タイプの美しい女性だった。年齢は20代後半だろうか…身長は165cmくらい、髪は肩までのストレート。小さな真珠のイヤリングが見える。黒いタイトスカートにジャケット。胸元には、ハート型のネックレスが見える。玄関には、黄色い花が溢れるような油絵が掛かっていた。ほのかに香水の香りが漂ってくる。

私は意識せずに、銃撃戦の弾痕を捜していた。

「どうぞ。お入り下さい。父は出てまして、今日は夕方にしか帰りません。」

リビングに案内されながら、高宮愛の柔らかな声を聞いた。きちんと整頓され、チリひとつ落ちていないリビングは、住人の性格を映し出していた。

「いつもは散らかってるんですよ。今日は頑張ってお掃除しました。」

「お父さんは、お仕事ですか?。」

「いえ。防衛庁に務めてましたが、退官しまして。今は交通事故関係のボランティアをしています。」

山際正義の目がピクリと動いた。このマンションは、旧防衛庁や防衛省関係の入居者が多い。

テレビとオーディオ関係のデッキの前に、ソファアが置かれている。その左にはパソコンが見えた。高宮愛はホームページを持っている。性同一性障害の研究者としては、日本でトップの人物だ。

そのパソコンの横に、フォトフレームに入った写真が4枚あった。右からひとつ目は、おそらく両親と写っている写真。バックはイージス艦のようだ。2番目は、どこかのバーのドアの前で、ミニスカート姿の写真。3番目は、顔がよく似ているので…兄妹だろうか? 男性と親しげに、肩を抱かれている写真。最後は、テニスコートのネットの前で、ラケットを持ったスコートの女の子が、泣き顔に憤

り（いきどおり）を込めた目で振り返っている。その女の子に向かって、両手を突き上げて駆け寄ってゆくように見える、後ろ姿の同じくスコートの女の子の写真。しかし、振り返っている女の子は高宮さんではなかった。

山際正義とソファアに座って、私は最後の写真に興味を引かれた。

高宮愛は、オープンキッチンでコーヒーを淹れて、運んできた。よどみなく、コーヒーを2つ置いて、私達の前に座った。

「高宮愛と申します。」

と言って、名刺を差し出した。

こちらも慌てて、名刺を出し交換する。

「大阪の女装っ子さんのハワイ土産のコナコーヒーです。最高ランクの豆なんです。美味しいですよ。どうぞ…。」

「今日は。山際さんには申し訳ありません。お会いすると言いながら、何も言えなくて…。」

山際正義は、明らかに「あがって」いた。

「取材と云うのは、こういう物だと父に言われています。顔を見るだけでも取材出来ないようでは、話にならないと。」

「イラクのレポートを読みました…。すごいお父さんですね。ご協力できなくて、申し訳ありません。」

山際正義は高宮さんをしばらく見つめて言った。

「失礼ですが、ご結婚は？。」

唐突に、あまりに関連性のない質問に私は慌てた。

「失礼だ。そんな事を聞くもんじゃない。」

しかし高宮さんは、口に手を当ててクスツと笑った。

「竹山さん。大丈夫です。山際は、真つすぐな目をしてらっしゃいますね。記者さんなら、質問に根拠があるはずですよ。それがちゃんとした根拠なら、お答えしますよ。」

私は首を横に振ってヤメ口と合図したが、山際正義は言った。

「こんなにちゃんとした女性が、独身と云うのは理解できません。僕なら放っておきません。そう思ったので聞きました。」

「それは筋の通った質問ですね。では…筋の通った返答をしなくては。その写真の人…。」

高宮さんは、自身と男性が写っている写真を、机の上から持ってきた。

「…将来は、結婚すると思っただけですが…玉突き事故に巻き込まれて亡くなりました。」

私は凍りついた。だが山際正義は平静だった。

「それは…名神高速道路で起こった12台が絡む玉突き事故ですね？。原因は…荷崩れで落下した鉄材を発見したトラック運転手が、急ブレーキを踏んだ事による…。先頭の運転手は死刑から、終身刑に減刑されています。その運動の中心にいたのが、高宮さんのお父さんですね？。」

「…よくご存知ですね。」

「神明被告の裁判は、興味があつて傍聴しました。実は、父の記者仲間の方に、死亡者の顔写真を見せてもらつたんです。その写真のカラーコピーを、その時見てるんです。高宮さんの大切な方だったとは知りませんでした。申し訳ありません。」

「いいんです。もう私の中では決着がついてますから。…ただ、人を愛するのが少し恐くなりました。自分の事が、どうでもよくなるくらい愛して、また失つたらと思うと…どうしても踏み切れなくて。」

「…すみません。十分答えて頂きました。そこまでで、やめましょう。」

慌てた山際正義を見て、高宮さんは、またクスツと笑った。

「山際さんの質問には答えないはずなのに。やられてしまいました。さすがは山際厚さんの息子さんですね。」

「いえ。不肖の息子です。もう僕からは質問しません。」

「…アラ残念。どうします？。竹山さん。」

私は話題を探して、4枚目のテニスの写真を見た。

「これには、高宮さんが写っておられません？。」

「あゝ、後ろ姿が私なんです。」

「テニスをやっておられたんですか？。」

「昔の話です。中学生の時に軟式テニス部にいまして…これは地区大会2回戦で初勝利した時の写真です。1回戦は棄権による不戦勝でしたから…。でも、この初勝利が最後の勝利です。3回戦は負けましたから。たまたま、この前衛の部長さんのペアが足をケガして、その代わりで出ただけですから。」

私はもう一度写真を見た。するとネットの向こうに、小さく相手の選手が写っているのを見つけた。

「あつ…この選手。相田良子あいだりょうこじゃ？。」

高宮さんは、にっこり笑った。

「竹山さん、すごいですね。さすが、スポーツライター。」

私は記憶を探った。

「…確か、宮内道代みやうちみちよとのペアで、中学生全国大会を、1年と2年の時に連覇している。しかし、3年の時に地区大会シードの2回戦。ストレート負けした。」

私は硬式テニスプロに転向した相田と宮内に、インタビューするため資料集めをしている所だった。

「高宮さんが、相田宮内ペアを破ったんですか！？。」

「結果的にそうになりました。お二人には申し訳なかったんですけど…。」

これはスポーツライターとして、ただ事ではない。相田宮内は、お互いに負けた事はあるが…そのキャリアの中で他の選手に負けた事がない。中学3年の試合を除いては…。この試合は地方予選で記録は無いに等しい。相田宮内にも、聞きにくく、聞いた人間はいない。

相田と宮内を破った人物が目の前にいる。

「高宮さん。この試合の話をしてもらえませんか？」  
「良いですよ。」

高宮さんは、何でもないと云う顔で笑った。

こうしたいきさつで、この取材は始まりました。

2話からは、所属していたテニス部の背景と、関係者へのインタビュー。7話で高宮さんのインタビュー内容と合わせて、試合をリプレイします。

遠い夏の日。

高宮愛と篠原<sup>しのはら</sup>妙子<sup>たえこ</sup>女子部長。無敗を誇った相田良子と宮内道代。

この幻の試合を再現してゆきます。

1次話。

第2話 上土居中学校軟式テニス部

## 1 第2話 上土居中学校軟式テニス部

### 1 第2話 上土居中学校軟式テニス部

話は高宮愛の中学校時代にさかのぼる。

かみつちい  
岐阜市立上土居中学校には、バレーコート兼テニスコートが校舎の前に3面あった。

授業で行われるバレーのせいで、雨の後のコートは足形でデコボコになる。さらに、ラインテープ以外の部分が掘れて、ラインだけ浮き上がる。

トンボと呼ばれる、地面を削る道具で、デコボコをなくし、浮いた土を重いローラーで圧縮する。

しかし、浮き上がったラインは手の施しようがなく、ボールがラインに当たれば、ボールはとんでもない挙動を見せた。

それ程強くもない。

トーナメントの一回戦を、勝てるかどうかと云ったレベルだった。

3年生は男子が6人。自動的に全員大会出場となる。女子は20人近くがひしめき、部内の予選が行われる。1年生2年生は、コートに入れず玉拾いとなる。わずかに全体練習を、コーチが行う時だけボールを打てるが、それも10回程程度と云った所だ。

最終的に、篠原妙子部長とペアを組み、中学生女子全日本チャンピオンを破る事になる高宮愛は、玉拾いをやっていた。中学校入学時に、椎名美花に頼まれて、軟式テニス部に入部した。椎名美花は、単にスコートがはきたいだけの動機で、高宮愛にはその動機すらな

かった。1ヶ月か2ヶ月で辞めれば良いと思っていた。しかし、部活にありがちな部内ルールがそれを出来なくした。1年生はスコート禁止と云う不文律で、椎名美花に2年生まで付き合っつてと言われてしまったからだ。

付き合いで始めたテニスは意外におもしろかった。別にコートでボールを打てなくても気にならない高宮愛は、部活仲間と結構楽しくやっていた。そうやって、玉拾いをしながら遊んでいる内に…1年が過ぎた。

30人近かった1年生は15人程度に減り、2年生になった愛と美花は、スコートをはいた。

軟式テニスの特徴は、何と言ってもボールが柔らかい事だ。硬式テニスに比べて、ボールが変形する程の回転を掛けられる。

極端にボールにドライブ回転（順回転）を掛ける事で、ロビングと呼ばれる…高い弾道で、バックラインぎりぎりに落とす技術がある。相手は後方に押し込まれ、ショットボールを打ち込めない。繋ぐか、狭いコースを狙ってギャンブルに出るかの選択を迫られる。どちらも、攻撃ではなく防御策だ。ロビングは試合の流れを自分サイドに持ち込むのが狙いだ。

ボールの柔らかさが、最も顕著に現れるのはサービスだ。右カーブ左カーブの変化は普通に使われる。カットサービスと呼ばれる…ボールの下から切るように打たれるサービスは、落下した後、真横に跳ねる事すらある。

もう一つの特徴は、分業制にある。

前衛と後衛とある。後衛のみがサービスを担当し、前衛はネットに張りついてボレーを担当する。ただし現在はルールが変更された。

前衛もサービスを打たなければならなくなった。しかし、この当時は前衛はサービスを打たない。  
さらに、軟式テニスにはシングルスはない。

前衛はバックラインに下がってはいけないルールはない。  
しかし、ほとんどの前衛は下がる事はない。サービスをレシーブする以外は、ほぼボレーしか行わない。理由は、前衛がネット際に居る、<sup>が</sup>んこう陣<sup>」</sup>…雁行陣だろうか？…と云うフォーメーションが最も有利な形である事らしい。ごく稀に、前衛もバックラインに下がる、<sup>」</sup>両後衛<sup>」</sup>と呼ばれるフォーメーションを採用するチームもあるらしい。

椎名美花は、打ち合えばバックアウトなので、前衛になった。愛は自動的に後衛になる。巧みに、バックラインぎりぎりに落ちるロビングで、愛はボールを繋ぐ事が出来た。部内の試合では…レギュラーチームを除いて…たいてい相手がバックアウトかネットに掛けてくれた。

しかし対外試合では、愛のゆるいサービスで美花が狙われた。  
軟式テニスのもう一つの華<sup>はな</sup>…前衛アタックだ。サービスをレシーブするプレイヤーの、正面ネットに張りついている前衛の顔めがけてラケットを振り抜くのだ。  
気持ちで負けると、ラケットが正しい面で出ない。下を向けば真下に吸い込まれる。上を向けば、コートの外にホームランになる。体が逃げると、ラケットを弾かれる。  
さらに前衛の左横をストレートで抜く事もある。クロスに後衛側に打つと見せかけて、ストレートに打つのだ。

ただし、これはギャンブルだ。失敗すれば、精神的優位を相手に与えてしまう。故に前衛は、前衛アタックをボレーで打ち破る事を要求される。

美花は。

まったく、前衛アタックをボレーでできなかった。ただし、愛も美花も部活動は、帰りの寄り道であり、ほとんど気にしていなかった。

対外試合が終わると、反省会がある。部員を前に、何が悪いかを言わされる。

美花がさんざん抜かれた事を3年生が怒った。済まなさそうにするが、解散すれば…夏なら…2年生全員で、タカラブネのアイスシュークリーム屋に自転車を走らせる。3年生の悪口を言いながら、アイスシュークリームをほおばり、笑い合う。まさにパラダイス、最高の日々だった。

しかし。篠原妙子女子部長は、美花と愛のペアを真剣に怒っていた。美花が普通にプレー出来れば、公式試合で一回戦突破は、確実だったからだ。もう2人、女子部長と同じ事を感じている人物がいた。

1人は、阿部史也男子部長。もう1人は、三崎真也コーチ。

この3人以外は、愛の可能性を微塵も感じていなかった。

本人は、軟式テニス部と云うパーティを、心の底から楽しんでいった。

―次話。

―第3話 三崎コーチにつづく



### ― 第3話 三崎コーチ

#### ― 第3話 三崎コーチ

当時。

愛の居た上土居中学校テニス部で、コーチをしていた三崎コーチは、ジュニアのテニスクラブの責任者になっている。ファルコンクラブと云う。

小学生を対象とした軟式テニスクラブの練習が終わった後、話を聞く事が出来た。

「高宮ですか。覚えてますよ。おもしろい選手でしたね。」

「おもしろい?。」

「ボールコントロールが巧みだね。あの当時の中学生にしては、試合を組み立ててゆける、稀な子でした。ただし、勝負師ではなかった。テニスを目一杯楽しんでましたが、目くじら立てて勝とう…なんて気は有りませんでした。まあ巧みと言っても、パワーがなかったもんですから、強いボールには打ち負けて押し込まれてしまうんです。部内では勝てましたが、対外試合は…前衛のせいもあって、ほとんど勝てませんでした。」

「パワーをつければ、いい線まで行けた?。」

「そうですね。決勝まで行けたかもしれませんが、でも、本人にその気は有りませんでした。」

三崎コーチは、楽しそうに話す人だった。企業のクラブに所属し、定年退職後のシニア大会から実力を発揮しだした。

ほとんどの県内大会で、常に準優勝する選手で、シルバーコレクタ

ーの異名を持っている。もちろん優勝も10を下らない。

ポール回し。あるいはケツ打ちと云う、必殺技を持っている。サイドラインに向かって、コートの外に出てゆくボールを、ネットポストの横を通して、相手のコートに打ち込む。弾道が低く、球速も速い為レシーブ出来ない。弾道が低いと云うのは、ネットの高さより下を通るのだ。これは、ルール上問題ない。しかも入れる為にカーブを掛ける。

「弾まないサービスと云うのは、ケツ打ちと似てますね。」

「ああ。高宮のファーストですか…。あれは、阿部が編み出したんです。偶然なんでしょうけど。ファーストサービスの基本と云うのは、手首を極端に使わない事なんです。教則本にも書いてあります。ファーストサービスって云うのは、サイドアウトよりバックアウトの方が多いんです。だから、気持的に、押さえようとして手首で押さえたいくなる。でも、手首で押さえようとすると、ファーストサービスの成功率が落ちるんです。ボールがラケットに接触する角度がバラつくでしょ？。同じ角度でラケットにボールが当たった方が成功率は上がるんです。でも…阿部史也は、それを安定させたんです。トスを一定の位置に、正確に上げる事ですね。」

「つまり…手首で押さえ込むサービスを、入るサービスにした？。」  
三崎コーチはうなづいた。

「レシーブ出来ない…と云うのは本当なんですか？」

「出来ません。サービスコートに入ると、地面を這って（はって）ピツと走るんです。ラケットを、地面に擦るように振ってもフレームに当たるしか有りません。コントロール不能ですね…フレームでは。偶然にネットを越える事を、期待するしか有りません。しかもそんなサービスを打つ人間は、今現在も阿部史也と高宮愛しか居ませんから…試合でいきなり打たれたら、対応不能です。阿部は交通事故で亡くなりましたから、あのサービスの技術を知っているのは、高宮愛だけです…今や。」

「三崎さんは、打てないんですか？。」

「打てません。まず入りません。やってみた事が有るんですが、使えません。阿部は百発百中でしたが、高宮はあの試合の後、まったく入らなくなりました。」

三崎コーチは、その幻のサービスをラケットで、ゆっくりと振って見せた。

「あの試合。高宮愛は得意のロビングを使ってないのは、何故ですか?。」

「…私のアドバイスです。打ち合うなど。相手は中学生全日本チャンプです。来た球は、全部決めるつもりで打ち込めとアドバイスしました。」

クラブの小学生が、三崎コーチの目の前に来て挨拶してゆく。

「コーチ。失礼します!。」

「はい。ご苦労さん。」

次々と、そのやり取りが終わると私は聞いた。

「高宮愛は、あの試合の後、テニスを離れたのはどうしてですか?。」

「さあ。あの子にとって、テニスは全てじゃなかったんでしょう。コートの方がイキイキしてましたからね、当時。…それで良いと思います。相田や宮内が、必ずしも幸せだったとは言えませんよ。」

「三崎コーチは、ラケットのガットを指で動かしながら言った。」

「三崎さん。テニスが全て…と云う人は、何に引きつけられるんでしょう?。」

「コートの外に、自分を見つけれない人でしょう。コートの中にしか、自分を見つけれなければ…コートに立ち続けるしかないでしょう?。」

三崎コーチも、そして相田も宮内もコートに立ち続けている。勝負は。

コートの中の者と、

コート以外の者の中で決せられたのだ。

―次話。

―第4話 能登島 秀彦につづく。

## ―第4話 能登島秀彦

### ―第4話 能登島秀彦

椎名美花の取材は拒否された。

彼女は結婚して、能登島と名字を変えていた。高宮さんの紹介だと云うのも効かなかった。

アフガニスタンから3日間だけ帰国した、記者仲間の山際厚氏が理由を話してくれた。

「マスコミアレルギーでね、奥さん。旦那さんの方なら、アポを取れるけど?。」

「能登島秀彦のんとうま しょうひこにアポが取れるって?。そっちの方が不可能じゃ?。」

「能登島解放の写真が撮れたのは、彼の要望だったんだ。何故かは聞くな。お互いの安全の為に。」(クライムズ クライシス参照)

「まあ…奥さんの事を聞くのも良いが…中学生時代の話だからな。」  
山際厚氏はニヤリと笑った。

私は面食らった。

「能登島は、その試合のあった時、阿部史也の前衛だったんだ。」

私は目を見開いた。

「まさか。世間は狭いと言っが…。」

「狭いな。能登島は、中学生時代の椎名美花をはっきり覚えていない。大学で再会して、恋愛関係になった。美花にとっては、憧れの先輩だったらしい。」

山際氏のコネで、能登島秀彦氏に会える事になった。

指定された場所は、私も良く知っている東京新宿のカウンターバーだった。岐阜に移ってからほぼ一年振りになる。

木のドアを開けると、バーテンダーのいっしき一色さんが、何事もなかったように

「いらつしやいませ。」

と言った。すぐにオールドグランパのダブルがカウンターに置かれた。

「業界の方は?。」

久し振りと云う会話は無いのが常で、昨日会ったかのような空気が流れる。

「さあ…。妄想のチクザンに頼ってた分、大変みたいですよ。皆さん余裕が無くなりました。」

「こつちも必死だよ。スポーツノンフィクションは、妄想じゃ書けない。今日も取材だ。能登島秀彦にインタビューする。」

ほとんど動揺する事の無い一色さんの顔に緊張が走った。グラスを磨く手が止まる。

「…心配ない。別件の取材だ。」

また、一色さんの手が動き始めた。

「しかし。本人がここに?。」

「プロテニスの相田と宮内を、軟式ダブルスで負かした試合を、見ている人物の1人が能登島だ。」

「…相田と宮内が?。負けた事が有るんですか?。」

「軟式の中学生時代の試合だが…。2人はお互いどうし以外では、その試合しか負けてない。」

「誰なんです。」

「前衛は篠原妙子。後衛は高宮愛。」

「高宮愛は、性同一性障害の?。」

「…よく知ってるな。」

「篠原妙子は…確か…ロバート キミツカの母親ですね。今、世界

ランキング7位でしたか…。」

「驚いたな。テニスオタクだったとは。」

「いえ。オタクじゃありません。プレイヤーです。関東の硬式テニス界じゃ、一色登いっしきののぼるの名前は有名です。」

「体に悪くないか？。夜の仕事明けでテニスとは…。」

「イメージがありますので。ここのお客様には内密にお願いします。」

「コートじゃ本業は内密か？。」

「もちろん。言いません。」

入り口のドアが開いて、一色さんは黙った後、言った。

「いらっしやいませ。能登島さん。こちらで竹山様がお待ちです。」

能登島秀彦氏は、新聞で見たアロハにリーバイスの姿だった。ただ、キャップはかぶっていなかった。私はすぐに、本題に入った。

「篠原妙子の後衛は、高宮愛ではなかったのに、どうして高宮を？」

「阿部史也と篠原が、映画を2人で見に行ったのが原因です。」

「と言うと？。」

「阿部史也は、テニス女子部では王子様だったんですよ。誰も抜け駆けしないのが、暗黙のルールでした。」

「嫉妬が原因で、篠原は孤立したと？。」

「全部じゃなかったと思います。70人近い部員の内の…5人が6人くらいが、完全に対立関係になりましたね。」

「待って下さい。高宮愛は、その後阿部史也と恋愛関係になりますよね？。」

「当時は、愛は自分の気持ちに気づいてなかったみたいですね。むしろ篠原を応援してましたよ。あの試合は、賭け試合だったんです。」

「賭け試合？。」

「ええ。篠原は不戦勝を除いて一回戦負けしたら、史也とデートしない事を、約束させられたんです。」

「逆に言うと、一回戦を勝てばデート出来る…と云う事ですか?。」  
「理屈ではそうですが。結局、デートする事はなかったようです。むしろ史也は、愛の方が好きだったみたいです。でも…愛は篠原に遠慮して、近づかなくなりました。あの後。」

「高宮愛には、勝たなければならぬ理由が有ったんですね。」

「もともと才能は有ったんですが、負けん気のない人でしたから。でも、負けん気を出す理由が有ったあの試合は、別人でしたね。他校のコーチが惜しいって言ってました。常にこのプレイが出れば、全日本でも勝てるってね。」

「有名だったんですか?。」

「愛をやる気にさせられる指導者は、県では三崎コーチしかいませんでした。見事に…すべての手を使って失敗しましたね。愛にはインタビューしたんですよ。」

「ええ。でも、選ばれた理由はケガだと言っていました。」

「篠原の後衛が降りた理由は、足の捻挫です。試合の一週間前です。でも、痛めてなかったですよ。愛は素直に受け取ったみたいですが…。」

私は、一週間と言っ言葉に気づいた。

「高宮愛は、一週間で弾まないサービスをマスターしたんですか?。」

「北の方に、岐阜市が運営する施設が有るんです。そのコートで、三崎コーチと史也と3人でやったみたいです。」

「それで、阿部史也は…?。」  
「好きになったと思いますよ。なにしろ、試合前日になるまで、一本もサービスコートに入らなかつたらしいですから…達成感は格別だったでしょう。」

高宮愛は、篠原妙子の為に頑張り。それが理由で、史也は篠原ではなく高宮に恋した。

「ままなりませんね。人生は。」

私は思わず、そう言った。

「だから、人は産まれて来るんでしよう。今度こそはってね。すべてが上手く行く人生が、どれだけつまらなくて意味がないかを悟るまで。」

「意味が無い?。」

「僕はゲームを作ってます。上手く行き過ぎるゲームを、面白いと思うゲームはいません。ゲームの面白さは、たらればです。何度もやり直せる所に有るんですよ。」

私は思った。

人生も、時間を戻せなくてもやり直す事は出来る。

高宮愛も、数年後やり直したのだ。このゲームを…。

―次話!

第5話 篠原妙子

につづく

## ―第5話 篠原妙子

### ―第5話 篠原妙子

上土居中学校テニス部元女子部長、篠原妙子はアメリカに居た。日系3世のジヨニー キミヅカ氏と結婚し、現在はアメリカ国籍を保持している。

息子のロバートは、成功率98パーセントを誇る時速200kmを超えるファーストサーブを武器に、プロテニス世界ランキング7位にランクされている。

造園関係の会社を営むキミヅカ家は、広大な日本庭園の中にあった。彼方に、マンハッタンのビル群が望める。

巨大な盆栽？が置かれたエントランスに出て来たのは、あの写真の面影を残す、丸々としたママだった。

「竹山です。今日は取材は可能でしょうか？」

「問題ありませんよ。あなたの書かれた、あの野球選手の記事を読みました。とても感動して…。あの記事を書かれた竹山さんにお会い出来るなんて光栄です。」

「ありがとうございます。でも、ロバート キミヅカのお母さんにお会い出来るとは…。こちらこそ夢のようです。」

妙子キミヅカにダメ元で取材を申し込んだのは、正直な所だ。将来グランドスラムを達成するかもしれない…と期待されているロバート キミヅカのメンタル的な部分を、サポートしているのは、彼女に他ならない。私が記事を書いているクアトロナンバース誌も、一年以上前からインタビューを申し込んでいたが、取材殺到で断られ

続けていた矢先だ。

「とにかく入って下さい。お茶を淹れますよ。」  
妙子キミヅカは、この上なく幸せそうだった。

「何故、高宮愛を後衛に指名したんです?。」

日本庭園が見渡せるリビングは、外国である事を忘れそうになるくらい、空気がピンと張り詰めていた。

「…そう。愛は部をまとめられる資質を持ってました。ただ、勝とうとゆう欲が無い人でした。だから、勝つ喜びを持って欲しかったです。私と組めば、1勝出来ると思ってました。若さのあやまちで、阿部君と映画を見に行っただんですが、それが私の後衛の坂巻さんを傷つけてしまったんです。」

「能登島さんによると、5、6人が妙子さんと対立した?との事でしたが?。」

「ええ。馬鹿ですね。中学生で、恋愛が何なのかも知らずにケンカしたんです。1勝できなかったら、阿部君と別れなさいって…映画を見に行ったくらいで、別れるもなにもないんでしょうけど…。当時は勝たなきゃって、それだけでした。だから、愛となら勝てる。そう思っただんです。」

「高宮さんは、その思いに伝えてくれたんですね?。」

「愛は。私が阿部君にふさわしいから、勝ちましょうってくれました。当時は嬉しかったですね。今思えば、愛の方がふさわしかったです。阿部君が愛と結婚するかもしれないって、椎名さんから聞いた時は…なるようになったなあと思いました。阿部君が亡くなったのは、今でも信じられません。そんな結末は、受け入れる事は私には無理です。2人は、幸せにならなければ嘘だとね…。」  
妙子キミヅカは、一瞬あの写真のように、目の奥に憤り(いきどおり)を浮かべた。

「あの試合で、妙子さんが写っている写真を、高宮さんに見せても

らえたんですが。その写真の目と同じ目をされました。今。」  
妙子キミツカは、ちょっと驚いて、外の日本庭園を見た。

「怒ってました。向こうのコーチが試合中にタイムを掛けて、フェンスに呼びつけて話をするんです。明らかにルール違反です。でも相手は全日本チャンピオンだし…言えなかったですね。だから、あの試合中ずっと怒ってました。」

「三崎コーチは、やればやるほど相手が不利になるから、黙ってたらしいです。」

「三崎コーチですか。策略家ですから。あの方らしい。ルール違反でなければ、すべての手を尽くせて言っていました。中学生にです。でも真正面から正々堂々と勝たないと、頂点は極められません。上手い選手になれても、決勝で勝てる選手にはなれません。」  
三崎コーチがシルバーコレクターの異名を持っている事が、頭に浮かんだ。

「勝った後。阿部さんとはデートされたんですか?。」

「どうでもよくなりました。そんな事は。愛が教えてくれたんです。自分の欲の為に必死になってた自分が、私の欲の為に必死になっている愛を見て。大切なのは、人の為につくす事だと。自分で作り上げたシナリオに酔ってた自分に気づいたんですね。そんなシナリオなんかよりも、もっと素晴らしい物がある事にも。」

庭を小鳥が横切っていた。  
「今でも。テニスはされるんですか?。」

「しますよ。軟式テニスのクラブを、私が運営してるんです。アメリカでは、あまりやる人は居ませんが。ワンダーだって。不思議なゲームだって言いますね。すごくロジック…理論的なテニスだと。」

「理論的?。」

「力押しでは勝てない。理論的に心理戦で相手を追い込み、仕留めるゲームだって。まるで、詰め将棋のようだ。」

「そう言われると…そんな感じはしますね。」

「でも愛は。理論的に追い込んでくる相田さん宮内さんを、力押しで封じ込めた。あんな事のできるプレイヤーは彼女しかいません。」  
そう。

高宮愛は、戦術と戦略と謀略を弾まないサービスで、メンタル面から崩壊させたのだ。

―次話！

第6話 相田良子 宮内道代につづく

## ―第6話 相田良子 宮内道代

### ―第6話相田良子 宮内道代

相田良子と宮内道代のインタビューは、私が記事を書いているクアトロナンバース誌の、別の取材に便乗させてもらった。

2人とも190cmの身長と、絞り込まれた肉体は無敵と呼ぶに相応あはしかった。

テニスウェアで、写真撮影も同時進行で、インタビューが行われるのを脇で見ていた。2人は、これから世界に出て行き、伊達公子以降空いている穴を埋めるべく期待されている。

メインの取材は、1時間30分程で終わり、私は呼ばれた。

「すいません。竹山透と申します。よろしくお願いします。」

相田は笑顔で、私を見て言った。

「よろしくお願いします。これは、どんな形で記事になるんですか？。」

「まったく別の記事になります。覚えていらっしやいますでしょうか？。篠原妙子。高宮愛を？」

反応は速かった。相田と宮内は、同時に言った。

「もちろん。忘れた事は有りません。」

ハモった事に気づいて、2人は顔を見合わせた後、笑った。

「実は、あの試合を取材してるんです。」

宮内がそれに答えた。陽気な相田と对象的に沈着冷静な人物だった。

「どこからその話を？」

「実は、別の取材で高宮愛を取材したんです。その時写真が有りまして。その中に相田さんが写ってましたので、もしかやと思って聞いたんです。」

宮内は懐かしそうな顔で言った。

「高宮さんは、今どこに?。」

「岐阜ですが…。聞いた事有りませんか?。性同一性障害の研究者になつておられますが?。」

宮内は相田を見て言った。

「なんとなく…。でもあんまり、そっちの方に興味がなくて…。意外ですね。研究家ってイメージはねえ、良子?。」

「…そうね。でも、私は試合が近づくと、高宮さんには毎晩会つてるんです。もちろん、夢の中ですけど。」

「夢に出るんですか?。」

「私は今の姿だけど、高宮さんは中学生のままなんです。軟式ラケットでサーブを打つて来るんですけど…。ボールは硬式なんです。でも、あのサーブなんです。コートに落ちて地面を這つて(はっ)てゆくんです。必死でボールを上に掲げようとするんですけど、ラケットに当たらないんです。そこで必ず目が覚めます。」

宮内は、それになづいて言った。

「まったく同じ。私もその夢を見る。それが、ウィンブルドンの決勝なの…。私の場合。」

「あゝ負けた。私はUSオープン。」

2人はお互いの肩に手を当てて笑った。

「それはダブルスですか?。シングルスですか?。」

「それが…。2対1なのね。篠原さんまでいるの…。道代も?。」

「私の夢は、中学生じゃなくてロバートママの姿よ。」

「じゃあ道代は勝てそうじゃん。なんとかレシーブすれば。」

「デカイの。ロバートママとラケット…。コートの半分をカバーしてるの。」

「え〜どういう事?。半分カバーしてるって。」

「コートの中の横で相田は、コートの中の目になって言った。グも使えないのね。」

「道代のキャラじゃないよ。それは、私のキャラじゃない?。」

「そうね。意外に私も良子と中身は同じかも?。」

また2人は笑う。

メインの取材をしていたフリーライターの北島が面喰らっていた。

この2人はこれほど笑わないのだ。

「…相田さん。宮内さん。夢にまで出てくる高宮愛と云う人物は、おふたりにとつて、どんな存在なんですか?。」

相田は遠い目をして言った。

「私達の基礎を形成してくれた人ね。テニスにどう向き合うかという部分の。」

「向き合う?。と言うと?。」

「試合つて。勝ちたいって気持ちだけでは駄目で…それに、もう一つ必要なんです。」

「何でしょう?。」

「…相手を負かして、その負けた悔しさ悲しさも受け入れて、包み込んでゆく大きさが必要なんです。そうでないと、攻めが甘くなってしまうんです。意識せずに。その大きさを、高宮さんは持つてました。私が勝ち続けられるのは、あの試合の高宮さんを見たからです。道代はどう?。」

「…同じね。私達が負けた時、篠原さんは泣いてたけど…高宮さんは、果てしないってくらい澄んだ目をして、私達と篠原さんを見てた。それで言ったんです。」

「何と?。」

「すみません。負けてくださって。ありがとつございます。一生忘れませんと。」

そう言った宮内の横で相田は、コートの中の目になって言った。

「私は。まだそんな風に言えない。けど…いつかそんな風に言えるプレイヤーになりたい。そう思います。」

宮内は相田に手を重ねた。私も同じだと…。

2人はそして、涙を浮かべた。

またもや、メインのスタツフが驚いた。この2人は泣き顔を見せた事などないのだ。

「終わりでしょうか。申し訳ありません。泣かせてしまいました。」  
私は立ち上がるうとした。

「竹山さん。篠原さんと高宮さんとの対談を企画してもらえないでしょうか?。」

宮内が私を見上げて言った。

「はい?。それは、こちらからお願いしたい位の企画ですが?。お二人共、スケジュール的には大丈夫ですか?。」

「セツティングして頂ければ、スケジュールは合わせます。」

「分かりました。やってみましょう。」

相田と宮内は、私に手を差し出した。

私は、その意外に柔らかい2つの手と握手した。

―次話!

第7話リプレイにつづく

## Ⅰ 第7話 リプレイ

### Ⅰ 第7話リプレイ

ここでは、高宮愛のインタビューを書く所ですが、そのインタビューに前話5人の証言をプラスして、私なりに試合を再現リプレイしてみたいと思います。

その日。

8月という事は一致している。何日だったかは誰も覚えていない。優勝者は、相田宮内と同じ中学校の2番手ペア向井 白井とだけ記録にあるが、日付はない。2人は教員として、現在ソフトテニスの指導に当たっている。

風はなく、雲ひとつ無い晴天だった事を、全員が覚えていた。どのコートだったかは、一番奥の片側がフェンスの無い場所だったと能登島が覚えていた。試合の当事者は誰も覚えていなかった。

バックラインのフェンスの向こうに、土手があり、その斜面で観戦できるようにになっていた。

篠原 高宮組の土手には、阿部史也と三崎コーチ 能登島の3人に、椎名美花を含む仲良しグループ5人が座っている。他の部員は会場に散っていて居ない。

対象的に、相田 宮内組のフェンス際には、下級生20人が整列して立っている。決められた掛け声で、応援をするためだ。

篠原には、これがプレッシャーになったが、高宮には関係無かった。高宮には、相田宮内しか見えていない。応援団は自分達を負かす事も、自分達が応援団を負かす事も出来ないと思っていた。

相田宮内にとっては、応援団はいつもの事だった。しかし、パニツクに陥る（おちいる）2人にとって、応援団は敗因のひとつになる。

審判台の前に、ネットを挟んで両チームが並ぶ。

「よろしくお願いします。」  
と挨拶がある。

前衛の篠原と相田がジャンケンを行う。負けた相田が、自分のラケットのマークのある側を示して、篠原側のコートで回転させる。回転させるのは、篠原のラケットの上。

相田は、マークのある側を篠原に向けて回した。この場合、高い確率でマークのある表面を上にも倒れる事を、三崎コーチに聞かされていた。ラケットが倒れる前に、表か裏かをコールする。

「表。」

篠原はコールした。何としても、サービス権を獲らなければならぬ。試合は5ゲームマッチで、3ゲーム先取。サービスゲームは確実に取れると確信していた。問題は、レシーブゲームの前に相田宮内を、心理的パニックに陥れる（おとしいれる）事が必要だった。レシーブゲームをひとつ取れば勝てる…と云うのが、三崎コーチの戦略だった。落とせば、間違いなく修正し対応してくる相田宮内には、勝ち目がない。

ラケットは、表向きに倒れた。篠原はサービスを選択する。ルール的には、相田宮内はコートの選択権を得られる。無風で、どちらのサイドも太陽光は目に入らない。相田は自分が立っているコートを選択した。

乱打と呼ばれる試合前のウォーミングアップがある。相手チームとボールを打ち合う。教則本には、ここで相手の得意と弱点、プレイスタイルを見極めると有る。後衛宮内は、高宮のフォア バックにボールを送った。ここでも三崎コーチの戦略が行われる。すべてロビングで、フォアに回り込んで打ち返す。これは、バックが苦手で早い勝負はせず、粘る（ねばる）プレイスタイルと云う解釈になる。高宮はバックが苦手ではなく、クロスにもストレートにも、威力はないが確実にコート内へ返す事ができた。さらに、すべてのボールを相手コートに打ち込めと言われている。

「レディー。」

と主審がコールする。両チームがポジションに移動し、サービス権を取った高宮に、ボールが2個送られる。それを見定めて

「サービスサイド篠原高宮組。レシーブサイド相田宮内組。5ゲムマッチプレイボール。」  
と主審がコールする。

最初のサービスは、高宮のコートの右側から。高宮はコートの右端に立っている。篠原は、左サイドに寄っている。

高宮のサービスは、クロス（対角線）に入る。万が一レシーブされれば、ボールはサイドにストレートに来る。

結果的に篠原は中央を開けた形になっている。それを見た宮内は  
…後衛の打ち合いになる…

と思っていた。

高宮愛の情報は無い。乱打での印象から、さほどのサービスも無い。ならば、前衛アタックを考えた。

フェンスから三崎コーチが叫ぶ。

「高宮。気合いを入れる！。決めるんだ！」  
続いて、阿部男子部長も叫ぶ。

「決める！！愛！！。」

高宮は、ゆっくりと間を取った後、頭上にボールを上げた。

それは、鋭いヘッドスピードでボールを打たきつぷすように見えた。ボールは、山なりではなく、真つすぐにレーザービームのように、高速でサービスコートのクロスに入ってくる。

宮内は、ボールのコースを予測してバックスイングし、体を開きながら篠原に向かってラケットを振った。

しかし、手応えもラケットに当たる音もしない。

ボールはラケットに当たらず、後ろに抜けていった。宮内は一瞬、何が起こったか理解できなかった。初めてボールを打った時から、空振りをした事が無いのだ。振り切ったあと、宮内が目を見開くのが、篠原には見えた。高宮は、次のサービスの為に逆サイドに歩き始めている。篠原も逆サイドに動く。それを見て、何が起こったか気づき、宮内は振り返ってフェンス際に転がっているボールを見た。

「宮内っ！。さっさとボールを拾え！」

コーチがフェンスの外から怒鳴る。

その声に、あ然としていた20人の整列した下級生が同時に言う。

「ドンマイです！。ファイトばんかい！」

宮内は走ってボールを取りに行く。

ボールは、高宮の手元に打ち返されてくる。今度は、前衛の相田に対してサービスが打たれる。

カウントは1-0。

相田は、このサービスが弾まずに地面を這うのを見ていた。

「すくい上げるしかない！」

と相田は思った。

しかし、テニスエリートの相田のフォームは固定されており、ラケットが地面を擦るようなスイングができない。低く振ったつもりだが、ボールの上をラケットは通過していった。

カウント2-0を主審がコールする。

相田はボールを取りにフェンス際に走った。すると、コーチが相田と宮内の名前を呼んだ。2人は反射的にコーチの所へ走ってゆく。高宮は平静に、次のサービスの為に逆サイドに歩いて行く。篠原は振り返って、三崎コーチを見た。試合中に呼びつけて、アドバイスするのはルールで禁止されている。しかし、三崎コーチは阿部史也と能登島の横で、動かない。椎名美花と仲間は、それがルール違反である事を知らない。

三崎コーチは、高宮のサービスに対して、何のアドバイスも効果が無い事を知っていた。このアドバイスは、悪い方向に追い込むだけであり、抗議するつもりは無かった。

三崎コーチの読んだ通り、このアドバイスはマイナスに作用する。

コーチはこう言った。

「何やつとる。あんなのに好きにやらすな。一本打ち返せば、ネットかバックアウトや。」

相田と宮内は、技術的にも精神的にも、放っておけば勝手に伸びてゆく選手だった。怒ってやれば、発奮はっぶんして、自分達で打開策を見つけられる…今までは。

しかし見た事もない、地を這うサービスに打開策は1つしかない。ラケットを地面に立てて、フレームに当たったボールが、偶然ネットを越える事を祈るしかない。しかし、その唯一ゆいいつの打開策を思いつく前に、4-0で第1ゲームは終わった。生まれて始めて、ノーポイントでゲームを奪われた。2人はパニックに陥った（おちいった）。何の修正も思いつかないまま、コーチの叱責しっせきに、勝たなければ…と云う思いだけが先走った。

2ゲーム目は、サイドチェンジして宮内のサービスになる。しかし。パニックになった筋肉は、生命の危機と判断して、固く緊張してしまっている。

「ばんかい！。フアイト！」

と言う応援のリズムが、トスト（ラケットの）スイングのリズムを狂わせた。

ボールは、真つすぐに高宮の頭上を抜けて、フェンスに激突した。

「フォルト。」

と主審にコールされる。

セカンドサービスは、ラケットが出て来ず、かるうじてラケットに当たったものの山なりに飛んで、サービスコートの外に落ちた。

「ダブルフォルト。」

ここでまたも、コーチが宮内を呼びつける。

…タワケか！ちゃんとやれ！。しっかりしろ…

と、能登島の所まで声が聞こえてきた。ちなみに、タワケとは関西ならアホ、武田鉄矢ならバカチンが〜と言ったニュアンスの方言である。主に東海地方岐阜愛知で使われている。

「言えば言う程、あかんようになる。」三崎コーチがつぶやく。その言葉通り、次のサービスは、2本ともネットに掛かった。

カウント0ー2。

それでも宮内は、修正を試みた。上からのサービスをあきらめ、下からラケットを出すカットサービスに切り替えた。

これは、上にあげるサービスよりタイミングが取りやすい。斜めの逆回転がかかったボールが、高宮のサービスコートになんとか入った。

「打ち合うな。どんな球が来ても、打ち込んで決めるー！」

三崎コーチの言った通り、高宮はフルスイングして相田に前衛アタックした。

相田も固くなっていた。左側を抜けてゆくボールに、ラケットが出

ない。

カウント0ー3。

宮内はなすすべなく、カットサービスを篠原に入れる。篠原は安全に、宮内にクロスで返球した。宮内はそれを、前に出てきた篠原の頭を越えるロビングで返した。

つもりだった。

それは、頭を越えず篠原の頭上に落ち、篠原はストレートにスマッシュを打たき込んだ。

ゲームカウントは、篠原高宮組の2ー0。

もはや相田宮内組は、1セットも落とせない。しかもサービス権は篠原高宮組にある。

3ゲーム目。

宮内は最初からラケットをコートに立てた。高宮のサービスは、1cmの狂いもなく同じコースに入ってきていた。

ボールはラケットに当たったが、上にながらずそのまま地を這ってネットまで跳ね返った。

カウント1ー0。

相田は、わずかに角度を上に向けた。ボールは、ネットの上のテープに当たり、越えない。

カウント2ー0

宮内は、相田より角度を上に向けた。

ボールは今度もネットのテープに当たったが、ネットを越えて落ちた。

篠原がすくい上げようとしたが、ネットに触れた。

「ネットタッチ。」

主審がコールする。

カウント2ー1。

相田も宮内をマネた。またも、ネットの上に乗ってコロリと篠原の

前に落ちた。これもネットに近すぎて返せない。

カウント2ー2。

宮内は、次のサービスもネットに当てて落とした。

カウント2ー3。

篠原は

…負ける…

と心の中で叫んで、高宮を振り返った。

しかし高宮は、いたって普通だった。振り返った篠原に、高宮はサービスする位置のまま言った。

「先輩。先輩は、阿部さんに相応しい（ふさわしい）です。だから勝ちましょう！」

その言葉を、相田も宮内も記憶していた。これだけ自分達を押し込んでなお、いたって普通でいられるこの選手に、なにやら好意を抱いてしまったと云う。

高宮はポイントを取られてからも、まったく同じサービスを、相田に打ち込んだ。

またもネットを越えるが、今度はネットに当たっていない。篠原はワンバウンドしたボールを、すくい上げる。

今度は相田の前にボールが落ちてくる。しかし、真上にしか上がらない。

カウント3ー3。

「サービス。」

主審がコールした。

ー次話！

第8話 リプレイPart2  
につづく！



## Ⅰ 第8話リプレイPart 2

### Ⅰ 第8話リプレイPart 2

カウント3ー3。

「ジユース。」がコールされた。ここからは、2ポイント先取になる。

宮内は立てたラケットの角度を左に向けた。高宮は、サービスと同時にネット際にダッシュする。ボールは斜めに高く舞い上がった。ネット際を、外に向かって落ちバウンドした。

高宮はコートの外に出てゆくボールを、ラケットに当てた。ボールは、審判台の下を抜けて、サイドラインに乗った。相田は背走したが、返しようがない。ボールは2バウンドした。

「アドバンテージ サーバー。」  
とコールされる。

そして、ラケットを立てている相田に、高宮がサービスを放った（はなっ）。

…?フォームが違う!!。…

相田は、とっさにフォアハンドストロークに持ってゆこうとした。その手からグリップが抜けた。ラケットは後ろに勢いよく飛んで、コーチの顔の前のフェンスに激突する。その相田の目の前を、山なりのボールがポコンと落ちてバウンドした。相田はそのボールを右手のひらを開いて打ち返す。ボールは篠原の正面に飛び、ボレーで

相田の左側を抜いた。

「ゲームセット。セットカウント3-0。勝者、篠原高宮組。」  
審判のコールが聞こえた。

篠原は目を潤ませて（うるませて）振り返った。高宮は両手を突き上げて、走ってきた。フラッシュがたかれ、三崎コーチがカメラを構えて、笑うのが見えた。

「やりました。先輩。」

篠原は、涙で高宮が見えない。そして、ネットの前で言った

「すみません。負けて下さって。ありがとうございます。一生忘れません。」

深々と、高宮は頭を下げた。

茫然とする相田宮内ぼっぜんの後ろで、さっきまで怒っていたコーチが帽子を取った。そして、同じように深々と頭を下げた。

このコーチは以後、怒らなくなったと、相田が振り返っている。

そして、篠原高宮組の3回戦。見事にサービスが入らなくなり、ストリート負けする。篠原は、アイスシュークリームを、高宮とその仲間、阿部能登島と食べに行ったと言う。

大会は終了し、高宮は好意を寄せ始めた阿部を避けるために、テニス部を退部する。

こうして。

高宮のパラダイスの日々は、終わりを告げた。

―次話！

― 第9話再会  
につづく！

## Ⅰ 第9話 再会

### Ⅰ 第9話 再会

再び現在。

クアトロナンバース誌がセッティングした対談は、9月に行われたあの試合が行われた旧県営グラウンドは、メモリアルセンターと名を変え、当時の施設はすべて作り変えられている。

プロ硬式テニス公式戦が行われる、観客席付きのセンターコートが、対談の場所として用意された。

軟式テニスのネットが張られている。

硬式との違いは、ネット中央にある。硬式は中央が低くなっているが、軟式は同じ高さだ。

審判台の片側にベンチが寄せられ、4人が並んで座れるようにセッティングされている。私が座るパイプ椅子の前に、白い軟式用ラケットが4本、グリップを合わせて立てられていた。

プロショット。  
と呼ばれる。

軟式用ラケットの傑作だと、カメラマンの杉本君が教えてくれた。

観客席を見上げると、三崎コーチと能登島さん。旧姓椎名美花さんが入って来て、ベンチ近くの観客席に座った。3人は、私が招待した。

椎名美花さんへの取材に対する、執念のつもりだ。顔写真だけでも

と云う意図もある。

腕時計は、1時50分を差していた。

私は観客席の3人に頭を下げた。3人は立ち上がって、軽く会釈した。

「あれが、椎名美花さん？」

カメラマンの杉本君が囁いた（ささやいた）。

「なんとか、あの3人も入れた写真も欲しい。」

「なんとかしましょう。」

そこに。

クアトロナンバース誌のテニス担当が、相田と宮内を連れて入ってきた。他のスタッフ10人あまりが、拍手で迎える。

相田は私を見つけた。

「竹山さん!!。」

と笑顔を見せた。

2人共、いつものテニスウェアに身を包んでいる。スポンサーの名前やロゴが、帽子からシューズに至るまで、付けられている。

勝つことが契約となっている国内プロで、2人は勝ち続けてきた。

そして、勝ち続けてきたプロ達が集まるワールドツアーに出てゆく。

それは、日本のテニス界の未来を左右する。彼女達は、明らかに兵士と言っている。負ける事は、引退を意味する。才能を持った者に

は、違うレベルの厳しさが存在するのだ。

私は、相田宮内と挨拶を交わした。

私は、相田宮内と挨拶を交わした。

2人は審判台寄りに腰掛けた。

クアトロナンバース誌のテニス担当、北島浩きたじまひろし氏が近づいてきた。

「すごいね、竹山さん御指名で、対談なんて……。中学生の時の地方大会の話だって?。」



「すみません。遅れてしまって。場所がわからなくて…。」  
高宮愛は、花柄のワンピースにハイヒールで、パーティーに遅れたゲストのようだった。  
「高宮さん。下に来て下さい。あわてなくても大丈夫です。」  
「え、竹山さん。どうやってそっちに?。」  
三崎コーチが立ち上がった。  
「高宮。こっちだ。ついてきなさい。」  
「ああコーチ。お久しぶりです。」  
と言って、また観客席の出入り口に消えた。

「すみません。私みたいなのが一番遅れて…。」  
言いながら走ってきた。高いヒールだ。ハイヒールの1000m走があれば、金メダルを取りそうな勢いだった。足腰の強さは、天性のようだ。

「愛。落ち着いて。こっちよ。」  
妙子キミツカが、笑いながら手招きした。

「篠原先輩。すみません。なんか変わっちゃって。」  
相田宮内は、優しい目で、このやり取りを見ている。  
私はカメラマンの杉本君に合図して、自分のパイプ椅子に座った。  
杉本君は、すでにフィルム一本を使い切っていた。

竹山「では。対談を始めさせて頂いてよろしいでしょうか?。」  
全員がうなづいた。

「…この企画は、相田プロ 宮内プロのご好意により実現しました。ありがとうございます。」  
相田「お礼は、私達の方です。ねえ道代?。」

宮内「本当に。夢みたい。」

宮内も相田も笑みがこぼれている。

竹山「では。まず、相田さんから行きましょう…。篠原高宮組の第一印象はどうでした?。」

相田「すごく失礼なんですけど。負けるとは思ってませんでした。普通にやれば、ストレート勝ちで終わる感じでした。高宮さんは、試合前の乱打で強い球を打たなかったし…バツクも打たなかったですから。」

竹山「あれは、三崎コーチのアドバイスだったと聞きましたか?。」  
高宮「そうです。バツクが苦手で、強いショットボールは打たない印象を与えられたと言われました。」

妙子「三崎コーチは、策略家だったから。でも、策略では1つ勝つのが良い所ね。でも、私達は1つ勝てば良かったから。」

宮内「男子部長とのロマンスの為に、竹山さんに聞きましたよ?。」

妙子「ロマンス?。ただの恋愛ゴッコね。…今考えれば。でも、当時は命がけだったけど。」

相田「乙女の恋心で挑いどまれたら、かなわないはずね。」

妙子「その命がけに巻き込まれた愛が、本気になったからよ。あの試合は、愛のプレイがすべて。私は、ネット際でボールすくってただけだから。(笑)」

全員が笑った。

相田「私もすくってましたよ?(笑)」

宮内「よく考えると…ボレーした?前衛のお二人は?。」

妙子「相田さんが手のひらで打ったボールを、決めたわよ。(笑)」

相田「あゝあれ?。ラケットがウチのコーチの顔めがけて飛んだのよね。(泣)」

高宮「どうなるかと思いました。あのコーチずっと怒ってたでしょ?。あの後、大丈夫かかって心配しました。」

宮内「あのコーチは、戦略で怒ってただけで本気で怒ってたわけじ

やないの。怒ると私達が工夫するから、怒ってたのね。」

相田「でも、わかっててもコワかった。怒り方も工夫してたから。」

高宮「演技だったんですか?。(驚)」

宮内「そうね。でも、妙子さんは、そのコーチに怒ってにらんでましたよね。(笑)」

妙子「ルール違反だもの。(怒)アドバイスのためのタイムは、認められてないはずよ!!。(怒)」

高宮「先輩。まだ怒ってるみたい?。」

妙子「ズウツと怒ってるわよ。あのコーチに会ったら、絶対文句言うつもりよ!。」

高宮「やめて下さい。もう終わった事ですから。」

宮内「高宮さん。冗談よ(笑)。ねえ妙子さん?。」

妙子「まあね。でもルール違反である事は、指摘させてもらっわよ(笑)。」

高宮さん以外は爆笑した。

竹山「でも、あの試合から、コーチは変わられたとか?。」

宮内「怒らなくなりました。それから…負けた相手に敬意を払えと言っようになりました。試合中のアドバイスもなくなりました。それに、相手チームを批判する事もなくなりましたね。今も時々会っんですけど。高宮を目指せと言われます。」

竹山「それは?。」

宮内「負けた相手に感謝できるチャンピオンになれと。高宮は1勝しかしなかったが、プレイヤーとしてはチャンピオンだと…。」

高宮「それは言いすぎです。私は、先輩のために勝ちたかったから

…お二人に申し訳ないなと思っただんです。私のワガママですから。」

妙子「それは、私だけじゃなく阿部君の為でもあっただんじやない?。愛?。」

高宮「…多分。でも。あの時それには…気づいてなかったです。」

竹山「あのサービスは、阿部さんから伝授されたそうですね?。」

高宮「はい。一週間やって、試合の前の日の最後くらいに入ると  
うになりました。」

竹山「入れる秘訣とか有るんですか?。」

高宮「トスですね。あのサービスが出る位置があるんです…

―文字数の都合により次話!

―第10話再会Part2につづく

## Ⅰ第10話 再会Part 2

### Ⅰ第10話 再会Part 2

高宮「トスですね。あのサービスが出る位置があるんです。右にも左にも。上にも下にも。わずかに位置がズレたら、あのサービスはホームランになってしまいます。下から見上げるでしょ？。ボールが頂点に達して止まる位置を記憶して、上げるんです。そして限界までヘッドスピードを上げて、ラケットを振る。…そして、ボールを打たきつぶす…手首を使って。力を入れるなって。力を入れるとラケットのヘッドスピードが落ちるって。…。」

高宮さんは、阿部史也を想い出しているようだった。

竹山「どうです？。宮内さん。プロとして弾まないサービスの秘訣は？。」

宮内「実は。あの試合の後、やってみたんです。全部ホームランでした。…トスは、どんなにやっても…わずかにズレます。体調が良くて、逆に体調が悪くても。想い返してみると、確かにあの試合の高宮さんは、機械がやってるように同じ位置に上がってましたね。あの子の試合はバラバラでしたけど。」

竹山「あとの試合と言うと、3回戦ですか？。」

宮内「次に当たった時に、どうするかをずっと考えて見てました。結局、試合で当たる事は無かったですけど。」

竹山「あのあと。高宮さんは退部されたんですね？。」

高宮「…ええ。ちよつと有りまして。」

妙子「いいんじゃない？。私は気にしてないわよ。阿部君が愛に、恋しちゃったのよね？。」

高宮「そんな。阿部部長は、あの時は…篠原先輩の彼でしたから。妙子「気にしてくれたのね。でも、あの試合の後は、どうでも良くなっていたの。…愛だけは、物語を続けてたのね。」

竹山「その物語は。今日この場所で完結ですね。できれば、阿部史也さんにもこの場に居てもらえたら良かったんですが…。」

高宮「それは。嫌がると思います。私達は恋愛関係になっちゃったし…篠原先輩が来ると言ったら来なかったかもしれない。」

竹山「どうです？。相田さん。こんな事情が有ったんですが？。」

相田「私達も、上土居の王子様って呼んでましたからね。そうですか…あのサービスは王子様のサービスだったんですか。…でも。阿部君は、自分の試合で使ってたんでしょうか？。記憶にないんですけど？。」

竹山「王子様の前衛が、上にいらっしやいます。どうでした？。能登島さん。」

全員が体をひねって、上の能登島さんを見た。

能登島「阿部はね。あのサービスはフェアじゃないからって、使いませんでした。使ってくれば、僕も苦労せずに済んだんですけど。」

「しばらく、全員が沈黙した。」

相田「…大きな人なんですネ。中学生で、そこまで考えるなんて。」

なんか、泣けちゃいますね。私は、勝ちも勝ちだったって、使える手はすべて使って来ました…コートの中で。今でも。」

高宮「それは。恥ずかしい事では無いと思います。相田さんも宮内さんも、当時から背負ってるものが違うじゃないですか。大変だなんて見てました。下級生に整列されて試合するなんて、私にはとても出来ません。強くない分、楽で良かったって思っていました。」

相田「ありがとう。そう言われると救われます。」

宮内「意識してなかったけど…やっぱりシンドかったかもね。」

竹山「お二人は、試合が近づくと高宮さんの夢を見られるとの事でしたか?。」

相田「ええ。私はUSオープン。道代はウィンブルドンの決勝でね。あのサービスを硬式ボールで打たれて、返せない所で目が覚めるんです。」

高宮「試合のたびですか…。」

竹山「そうらしいですよ?。」

高宮「申し訳ありません。」ご迷惑かけて。」

妙子「愛が呪ってる(のろってる)ワケじゃないんだから…(笑)。」

高宮「でも。まだ夢の中で、あのサービスを受けてらっしゃるなんて…申し訳ないです。」

その言い方に、全員が笑い出した。

その笑いが収まった所で私は言った。

竹山「相田さん。もし今なら、あのサービスをレシーブできますか?。」

相田「試合の前ごとに見てますからね。(笑)これを見て下さい。」

相田さんは、ラケットが何本も入るバックを持って来ていた。その中から、2本ラケットを出して、カバーを取った。軟式ラケットが現れた。

相田「これ。そこに有るのと同じプロシヨットです。でも、ここが削ってあるんです。」

相田さんは、フレームの片側を私達に見せた。薄く削られている。

相田「コートの地面を、滑らせるようにしてあるんです。そして、ボールができるだけラケットのガットの部分に当たる効果も期待しています。」

竹山「どうして、この改良を?。」

相田「私達は、高宮さんの消息は知りませんでした。もしかしたら、試合に出て来るかもしれない。その時の為に、自分達で削ったんです。でも強度が落ちるから、一本フレームが折れましたけど。これも、強く地面に当てたら折れます。でも、壊さないように地面を滑らせる方法を、道代と練習しました。」

竹山「宮内さんも、持ってられるんですか?。」

宮内「はい。バツクの中に。」

相田「試合前に、このラケットを握ると落ち着くんです。高宮さんが出て来ても大丈夫だって。」

高宮「わかりました。」

そう言つて、高宮さんはベンチから立ち上がった。全員が何をするのかと、あっけにとられた。高宮さんは、前に立ててあったラケットの一本を手にとった。

高宮「テニス部を辞めてから、ラケットは握ってませんけど…打たせてもらえませんか?。相田さん。宮内さん。あのサービスを?。」  
全員が高宮さんを、じっと見つめた。

―次話!

第11話ゲームセットにつづく!

## ―第11話 ゲームセット

### ―第11話ゲームセット

妙子「愛？。ヒールとワンピースでテニスするつもり？。」

高宮「別に、サービスを打つだけで、打ち合うわけじゃないので…  
裸足はだしでやります。」

相田「待って。24のテニスシューズは大き過ぎる？。」

高宮「ピッタリです。」

相田「じゃあ、これを使って下さい。」

相田さんはバックの中から、予備のテニスシューズを取り出した。

高宮さんは「すいませんーと言って、相田さんの所に歩いて行って履き替えた。

相田「ジャージも有りますけど？。」

高宮さんは、サービスのフォームでラケットを振って、言った。

高宮「いえ。これで行きます。」

4人がコートに散った。

もはや私が入り込める余地は無い。空気が張り詰めた。

これは試合ではない。ないが、明らかに相田宮内組のリターンマツチだった。

宮内「練習しなくても大丈夫ですか？。」

宮内さんは持球態勢に入っている。

高宮「大丈夫です。でも時間は下さい。行く時は、行きますと言いますから。楽しんで下さい。」

高宮さんは、ラケットとボールを体の前に、揃える（そろえる）姿で目を閉じていた。

何かを待っているように見えた。

三崎コーチが観客席から叫んだ。

「高宮！。気合いを入れる。決めるんだ！」

それは。あの日一本目のサービスを打つ前に、三崎コーチが叫んだ言葉だ。そして、阿部史也が「決める！！愛」と叫んだが、その阿部は亡くなっている。

「決める！！。愛。」

それは能登島秀彦だった。

その声と同時に、何かの匂い（におい）が漂ってきた。私はつぶやいた。

「タバコ？」

しかし、10人のスタッフの中にも、観客席にも、コートの中の4人にも、タバコに火をつけている人間はいない。そして。

高宮愛は、目を開いた。

「宮内さん。行きます。打ち返してください。」

宮内は待球態勢になった。

カメラマンの杉本君が、シャッターを押し放しにして、連続写真を撮り始めるのと同時に、高宮愛の手からトスが上がった。

高宮愛は上を向き、ボールはその顔の上に乗っている。

かなり高い。ラケットの先端ギリギリに当たる高さに思えた。ラケ

ットが振り出され、体重は左足に移動する。右足は地面から離れた。ボールが頂点に達した瞬間に、ボールはラケットの鋭い残像の中に消えた。

ボールはラケットの先端で、押し潰されて張り付きながら、手首の返しが直角になるまで離れなかった。その真下を向いたラケットから、ボールが飛び出してゆく。後で見た連続写真と、ハンデイクムで撮られたビデオには、完全に押し潰されて楕円形だえんけいになった、鏡餅状のボールが写っていた。

それが、ネットギリギリをかすめて、サービスコート6m40cmの長さいっぱいに入る。

宮内は、限界まで体を落として、フレームを削ったラケットを地面に平行に滑らせてゆく。

ラケットがボールと接触する。

宮内は、スイングの中間地点まではラケットを上に向けている。そこから、ラケットを振り上げながら、張り付いてきたボールを、ラケットでかぶせるようにして振り抜いた。

ラケットの軌道だけ見ると、地面を擦る（こする）ように平行に動き、急に山なりに上がり、肩まで振り抜かれた。

ボールは、無回転から順回転のドライブが掛けられて、いったん上上がった後、急激に落ちた。

角度は、宮内から見ると左に45度で、サイドラインのラインテープにオンラインして、弾んだ。

そこには、気づくと高宮愛がいた。

花柄のワンピースを翻し（ひるがえし）、サイドからネットポストと審判台の間を通して、打ち返した。

このコースを読んでいたであろう相田は、バックラインまで下がっていて、体を開きながら妙子キミツカの頭の上を越えるボールを打ち返した。

しかし、ウィークエンドプレイヤーの妙子キミツカは、背走はいそくして向き直ると、コートの中に落ちてきたボールをスマッシュする。それを、ネットに詰めていた硬式テニスプロの宮内が、当然のようにハーフボレーで、妙子キミツカの横に流した。ボールは2バウンドした。

終わりかと思っただが、高宮愛は相田にサービスを打つために、逆サイドに歩き始める。相田はサービスコートの後ろで待球態勢に入る。タバコの匂いは、し続けている。タバコを持っている人間はいない。

次のサービスも同じように、クロスに入った。

宮内と同様のフォームで、相田は振り抜いた。ボールは、妙子キミツカの真正面に飛んだ。

前衛アタックだ。

妙子キミツカは、それをボレーした。

そして。

またしても宮内は、ネットに突進してきて、そのボレーをダイレクトで妙子キミツカの真正面に拾い返した。

妙子キミツカのラケットは左を向いている。その右に来たボールに対して、切り返せない。そのラケットと交差して、右手が出てボレーした。

あの日の相田のように。

相田に向かってきた、そのボールを再度ストレートに打ち抜いた。

高宮は走ったが、ラケットの先をボールは通過した。

「ゲームセツト。」

三崎コーチが叫んだ。

そして、ロバート キミヅカが付け加えた。

「ベストゲーム。オブ ザ 4ガールズ ライフ。」

北島が日本語で言う。

「最高のゲーム。4人の少女の人生の中で。」

4人の、かつての少女達は、ネットに集まり、

「ありがとうございます。」

と声をそろえた。

あの日と同じように。

そして4人で抱き合って泣いた。

妙子キミヅカが言った。

「阿部君がいればね…。」

高宮は答えた。

「マルボロの匂いがしてたでしょ？。彼は居てくれたんですよ。」

―次話！

―第12話椎名美花につづく！



## ― 第12話 椎名美花

### ― 第12話 椎名美花

対談は、凄まじい（すさまじい）おまけ付きで終了した。

私は、4人と挨拶を交わして、イスに座り込んだ。4人は、2次会にどこかに行くつもりらしく、出て行った。

上から声がした。

「竹山さん。美花が話しがしたいと言ってます。上がって来ませんか？。」

振り返って見上げると、能登島さんが笑っていた。

スタッフは、撤収を始めている。カメラマンの杉本君は、現像するために、急いで社に戻って行った。北島氏は、ロバート キミヅカに食いついたまま居なくなった。

観客席が上がって行くと、能登島さんが美花さんの隣りに促した（うながした）。

美花「竹山さん。これは記事になるんですか？。」

竹山「高宮さんも妙子さんも、そのまま書いてくれて構わないと言ってますが…最終稿はメールを使って、校正してもらったつもりです。」

美花「実は。阿部部長の事なんですけど。」

竹山「はい。」

美花「妙子さんと、つきあった訳じゃないんです。」

竹山「でも。映画と一緒に見に行っただんじゃないんですか?。」

美花「妙子さんに、愛との間を取り持つてくれるように、頼んでたんです。妙子さんは、見たい映画が有って、交換条件で阿部部長が映画代を出したんです。」

竹山「じゃあ最初から?。阿部部長とデートしたと言うのは...。」

美花「知っていたのは...私と妙子さんと阿部部長だけです。3人以上には、言わない約束でした。妙子さんは、阿部部長を好きでした。交換条件で有っても、妙子さんにとってはデートだったんです。けっして嘘ではないんです。」

竹山「その約束は、今でも有効なんですか?。」

美花「はい。タバコの匂いがしましたよね?。約束を守らせる為に、阿部部長が来たんです。」

竹山「あれは...みんなしてたんですか?。タバコの匂い。」

三崎コーチも能登島さんもうなずいた。

竹山「...これは。書けませんね。スポーツノンフィクションですから。オカルト物になってしまいます。」

このゲームの主演は、最初から最後まで阿部史也だったのかもしれない。...いや。5番目のプレイヤーと言うべきか...。

考え込んでいる私に、三崎コーチが言った。

「どちらにせよ。このゲームは終わりました。次のゲームが待っています。竹山さんもライターと言うコートで、次のゲームが待っていますよ。勝とうが負けようが、行くしかない。前を向いてね。」

前を向いた者だけに、未来は扉を開いてくれる。女子硬式テニスワールドツアー。息子の世界ランキング。性同一性障害の人々を救う研究。

これからも、4人は未来への扉をたたき続けるに違いない。

新たなベストゲームをつかむために。

―後書きにつづく

## ―後書き

### ―後書き

恋愛にありがちな、すれ違いの中で、お互いを求めてゆく気持ちを描いてみました。また、三人称ではなく一人称の小説を、いかに読める小説にするか？と言う実験もしてみました。さらに、携帯独特の漢字に違和感を感じるものの、使わないわけにもいかないもので、（ ）で読み仮名を付けてみました。題名がひらがなののは、現在の4人に比べて幼い（おさない）けれど、一生懸命だった記憶の物語…と言う意味合いを込めました。

設定的には、その後高宮愛は高校生の時に両親の離婚に見舞われ（みまわれ）ます。原因は、イージス艦の副艦長だった母親が機密漏洩事件に巻き込まれた事によるわけですが、これは今の所執筆する予定はありません。ただし、両親の離婚をキッカケに、阿部史也とやり直す事になります。そして、タイフーンアイに行きつく事になるわけです。

作者的には、高宮愛を最終的に幸せにしようと思ってるわけですが、このキャラは頑として拒否してくるので、長い戦いになりそうです。

前書きにも書きましたが、この小説は竹山透が記事として入稿する前の、校正段階の文章と言う事になります。

何故かと言うと、第12話椎名美花の内容は、クアトロナンバーズ

誌に掲載される前の最初の校正でカットされなければならないからです。

同じく、第11話のタバコの匂いの部分もです。

主題は、勝利と敗北の意味でした。

試合に勝つために、篠原は史也を失い、史也は愛を失います。しかし、大切なのはその後、史也と愛はお互いを取り戻した事です。どう取り戻したかは描いていませんが、それはまた、前述の別の物語になります。

勝利にも敗北にも、得る物と失う物が有ります。大切なのはそれを、次にどう繋げるかでしょう。

恋愛もまたゲームでは有ります。ただし、もて遊ぶと言う意味のゲームではありません。

また、何を持って勝利と呼ぶかも様々(さまざま)です。勝とうが負けようが、行くしかない。前を向いて。

作家も、賞賛されようが失敗作を書こうが、次回作に向かってゆくしかありません。こんな自分を、待っていてくれる人が一人でも居る可能性が有る限り。

ここまで読んで下さったあなたに感謝します。  
では。次回作でまたお会いします。武上溪でした。

2009年1月1日



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8275f/>

---

べすとげーむ おぶざらいふ

2010年10月17日15時15分発行